

視点 //

日常生活を大切にする

帝塚山大学 教育学部教授 松浦真理



『うさこちゃんときやらめる』という絵本をご存じでしょうか。タイトルからして「ミッフィーのシリーズね」と皆さんならすぐに思い浮かべられることでしょう。4年前に亡くなったオランダの作家ディック・ブルーナさんによる絵本シリーズの1冊です。うさこちゃん絵本は、1964年に福音館書店から「子どもがはじめて使う絵本」として出版されて以来、講談社からはミッフィーのシリーズとしても出版され、5000万部以上の売り上げがあります。小さなうさぎの女の子とその周りで起きる出来事を描いた絵本は、小さく真四角で、シンプルな色と構図がわかりやすいので、おそらく幼児よりは乳児期によく読まれていると思います。このお話は、お店にあった大好きなキャラメルを思わずポケットに入れて持ち帰ってしまい、悩んだ末にお母さんに話して一緒にお店に返しに行くというものです。出版当初うさこちゃんが万引きをするなんて！と話題を呼びました。この1年前には『うさこちゃんとたれみみくん』という、いわゆるいじめを扱った話も出ています。

これらの絵本が出版されたときにまず浮かんだのは乳幼児向けに書かれた日本の絵本で、果たしていじめや万引きを題材に扱ったものがどれぐらいあるだろうかという疑問でした。同時にオランダの社会と教育のつながりを研究している私は「オランダらしいなあ」と感じたものです。それは何もオランダの子どもたちの間でいじめや万引きが頻発しているということではありません。それどころか、ユネセフの調査では2009年・2013年・2020年の3回連続で、子どもの幸せが1位の国であるということになっています。日常生活の中で誰もが遭遇しそうな出来事を、それがたとえ子どもにとって

「望ましくない」ようなことであっても話題として取り上げるということにオランダの国柄を感じたのです。うさこちゃん絵本の内容の多くは子どもの日常生活を描いたもので、子どもがワクワクするような冒険やファンタジーを扱っているものはほとんどありません。小さな子どもでも（子どもだからこそ？）無意識に店の商品にスッと手が伸びてしまうかもしれない、友だちとのちょっとした違いからからかったり馬鹿にしたりするかもしれない、という感覚を大切にした絵本だということです。『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』もそうです。大好きな家族の死に直面して悲しみに遭遇することは小さな子どもにも普通に起こりうるということを子どもたちに伝えているのがうさこちゃん絵本の本質だと考えられます。

オランダの保育施設や学校では入学（入園）式はありません。日本と比較して園や学校で行う行事も大変少ないです。行事や特別な体験活動をたくさん準備して、日常では味わえない経験をすることで様々なことを知ったり感じたりしてほしいと願う日本の多くの幼稚園とは真逆のようです。季節や伝統の行事・地域にも開かれた体験活動は、今の時代とくに大切なことだと考えられます。でも、それを重視しすぎて日々の保育が置き去りにされるような場面はないでしょうか。日常生活は平凡なようでいて実は様々なことが起こります。乳幼児も例外ではありません。そこで見聞きし、体験したことを積み重ねて子どもは自分の考え方を成長させていきます。だからこそ日々の生活の1コマ1コマで起こる小さな出来事を基本にした保育をこれからも大切にしていただきたいと願っています。